

二〇二二年二月一日

韓・日の文学に現れた純白のイメージ

ソウル大学名誉教授 金 允 植

一、水曜集会、一、〇〇〇回がおかれた場所

初めに新聞記事ひとコマを紹介する事で今日のお話を始めたいと思います。

日帝植民地慰安婦動員に関して、日本政府の謝罪と賠償、責任者の処罰などを追求する水曜集会が二四日（二〇一
一・一二・一四）一、〇〇〇回を迎えた。この日ソウル中学洞駐韓日本大使館前で開かれた水曜集会は、市民一、〇〇
〇余名が参席し、大使館前の道路を一杯に埋めた。

韓国挺身隊問題対策協議会は、一、〇〇〇回目の集会を記念して、日本大使館向かい側に、平和碑、を建てた。ソ

ウル平和碑は市民の募金で慰安婦として連行された一三歳の少女を彫った青銅像で、少女はこぶしを握って日本大使館を正面から眺めている姿である。平和碑を彫ったキム・ウンソン氏(四八)は、幼い少女が感じたであろう悲しみと怒りを表現した”と語った。

『中央日報』二〇一一・一一・二五

ここに登場する用語にまず注目してください。韓国側は、**挺身隊**と呼ぶという点。日本側の用語で言えば、**従軍慰安婦**にあたります。男たちが国のために軍に動員された時、これに対応する女子挺身隊が作られたのは一九四四年であり、彼女らは軍需工場などに自発的に動員され、その中には良家の娘たちもいましたが、様々な女性的条件によりかなりの摩擦も生じたことが知られています。『朝日新聞』一九四四・六・五、**体を顧みないで先頭に立つこと**、の意味を持った用語に、**女**、という限定詞が付いて作られた、**女子挺身隊**として、最後まで残った層がほかならぬ、**従軍慰安婦**です。もちろんこの中には日本人、中国人、台湾人、インドネシア人、オランダ人、フィリピン人そして朝鮮人などが含まれます。この中で日本人を除けば残りは強制または準強制的に動員された人たちですが、ただ一つ朝鮮人(韓国人)の場合のみが問題となり、戦後韓日関係の中で清算されるべき課題として今日に至っているのはどういう理由からでしょう。日本側の公式的立場は、韓日会談(一九六五)で請求権は完了したとしています。しかし国民の十分な同意もなく、韓国の軍事政府側で一方的に急いで調印した請求権(民衆党国会議員六一名が韓日協定に反対し国会議長に辞職書を提出)であったので、国際法とは関係なく、受け入れがたい課題として残されるほかなかったのです。もちろんその後、日本側もこの問題の解決に相応の解決策を模索してきたことも事実です。村山内閣が先に立って設立した、**アジア女性基金**は、その中でも際立ったものです。具体的には一九九五年五十嵐官房長官が先頭に立って基金を集め、首相の謝罪の手紙とともに

補償を実施したことも事実であり、またその成果も相当なものであったことが明らかにされています。(大沼保昭『慰安婦』問題とは何だったのか』中公新書、二〇〇七)しかしこのような一握りの措置の限界という特徴は、どこまでも民間人側の案件であったという点からきます。戦後、連合軍の裁判過程で、各国軍隊の慰安婦問題比較論を始めとして、日本軍隊だけの特殊性も明らかにされてはいますが、要するに日本側は、(1) 従軍慰安婦に関する政府所管資料の全面公開、(2) 国際法違反行為、戦争犯罪を日本国家が行った事を認め謝罪すること、(3) 責任者処罰をしてこなかった事に対する責任を認めること、(4) 被害者の更生 (rehabilitation) の実行、(5) 被害者の名誉回復と個人賠償、(6) 何が過ちであったのかを明確にとらえ、過ちを繰り返さないための歴史教育・人権教育の実施及び被害者を追悼する記念碑の設置、資料センター設置、記念館の設置、再発防止措置の実行が成し遂げられねばならないという事、それがなされなければ、またこの事実を覆い隠してきた日本の文化および対他民族意識の革新なくして、国際的信頼を得ることが難しいと主張されます。(吉見義明『従軍慰安婦』岩波新書、一九九五、二三四頁)

右に提示された(6)項にしばし注目してください。被害者を追悼する記念、まさにその一つが水曜集会一、〇〇〇回目に造られた一三歳少女の平和碑です。だとすると、これに呼応する日本側の反応はどうだったでしょうか。

あなたたちの恨を解きほぐして差し上げたい。ごめんなさい、

おばあさんたちに正義を！

真実の一つ。日本政府はおばあさんたちに謝罪してください、

おばあさんといつでも一緒、

反省しなければ暗い未来が近づくのみである、

このような文句は大部分日本語で書かれたものです。その中には下手な韓国語もありましたが、日本各地から東京に集っ

た女性たちが、一、〇〇〇枚の布の切れ端を一つに繋いで縫った切れ端ごとに刻まれたものです。横九m縦一二五cmの大きな幕の様なキルト (quilt) 作品。一月下旬から日本各地の慰安婦問題解決追求集会でお目見えしたこの広げた幕は、ソウルで開かれた一、〇〇〇回集会上に送られました。

西村スミ子日本軍慰安婦問題関西ネットワーク共同代表は、一日『ハンギョレ』新聞との通話で、北海道から沖繩に至るまであちこちから布地を送ってきた。また、慰安婦ハルモニ（おばあさん）の問題解決を心から願う我々の心が布地の一枚一枚にこめられている」と語った。日本の市民団体はこのキルトの作品をこれから造られる〈戦争と女性の人権博物館〉に寄贈する計画である。

『ハンギョレ』新聞二〇一一年二月二二

ソウルで一、〇〇〇回集会上が開かれている時に、日本人たちは日本外務省庁舎を人間の帯で包囲する計画であったし、李明博大統領が訪日（一七、一八日両日）して、首脳会談の席上で、日本政府に強力で要請しましたが、首相の冷淡な反応も報告されています。また少女の平和碑に対抗した日本の右翼団体が、駐日大韓民国大使館前に竹島（韓国の独島）の石碑を建てようとし、日本側はこれを許可しなかったことも報告されています（『中央日報』二〇一二年二月七）。竹島の日（二月二二日）が島根県に制定されていて、石碑建立計画がソウルの平和碑が建てられた一週間あとに、計画されたことも報告されていますが、戦争の歴史とは距離が遠いものでしょう。にもかかわらず、竹島の石碑を出し抜けに設置しましたが、大使館側がすぐに撤去しました（『朝鮮日報』二〇一二年三月二六）。社会運動家であり牧師である八一歳の野村基之氏（もとむらき）が歌曲「鳳仙花」を、平和の少女碑の前でフルートを演奏したりもしました（『東亜日報』二〇一二年二月

一四)。これからもあれやこれやの事があると思われます。韓国政府に登録された慰安婦は総二三四名で、このうち生存者は六〇名です（『東亜日報』二〇二二・六・一五）。

この話の前置きがあまりに長かったでしょうか。でも、私がお話しようとする要点だけははっきりしたことと思います。日本国家の沈黙の中でも民間人の次元で従軍慰安婦問題の解決のための努力があったということ。一三歳少女の平和碑、という韓国側に呼応して、一、〇〇〇枚の布切れてキルト作品が作られたということ。これを要約する一番確実な言葉があるとするれば、それがまさに芸術そのものです。一三歳少女の銅像、と、一、〇〇〇切れの言葉を様々な色で刻みつけたキルト作品、を芸術と呼ばずして、他に表現する方法があるでしょうか。想像力または間接化を狙った芸術こそは、政治的または歴史的難題を突破することの出来る、文化の価値ある部分の一つであると私は信じてきました。ですから、このお話は文学を芸術（間接化）の一つの枝であるとして生きてきた私の立場では、文学の上での従軍慰安婦問題であるのです。韓国文学は挺身隊を日本文学は従軍慰安婦をどう描いて来たのか。彼らの間に置かれた文学としての共通性がどのようなイメージを作ってきたのか。貧弱な資料ではありますが、これは私が出来る、またやらねばならない領域なのです。

二、まぶしい白い脚、暗闇の中に現れた白いシャツ

批評家江藤淳（一九三二～一九九九）の高名な評論『成熟と喪失』（一九六七）が及ぼした影響力を評価するにあたって、次のような言葉まで登場するほどでありました。

時代の自画像を写し出す、鏡のような作品がある。その自画像のあまりの正確さに、わたしたちはひるみ、目をそむけたい思いにかられる。そのように涙なしには読めない作品があるとしたら、わたしにとって六〇年代は江藤淳の

『成熟と喪失』、八〇年代は三浦雅士まさしの『私という現象』（冬樹社、一九八一）がそれだった。

上野千鶴子『成熟と喪失』から三〇年（江藤淳『成熟と喪失』解説、

講談社文芸文庫、一九九三）二五六頁

『成熟と喪失』の解説を書いた女性運動家上野千鶴子。日本女性の地位向上のために献身してきた彼女の立場から見れば、単なる文学評論書に涙を流すほど切迫感を帯びた事ではありますが、冷徹な視線で見れば『成熟と喪失』全体が文学評論である前に日本文化論、正確には人類学的分野に属する作品と言えるでしょう。

この評論の最初の章は安岡章太郎（一九二〇〜）の中編小説『海辺の光景』（一九五九）で始まっています。うたをうたふことは母が得意にしたものの一つだ。がそれですが、そのような歌を一人息子の信太郎はおくるみの中から聞いて、それがどれほど子供の情緒の上に君臨し抑圧したのかを問題視したこと。をさなくて罪をしらず、むづかりては手にゆられし、むかし忘れしか。春は軒の雨、秋は庭の露、母は泪かわくまなく祈るとしらずや、江藤淳はこの日本式の歌をアメリカのカウボーイの歌と対比させています。ゆっくりり行け、母なし仔牛よ、せわしくなく歩きまわるなよ、うろろうするのはやめてくれ、草なら足元にどっさりある、だからゆっくりりやってくれ、それにお前の旅路は、永遠に続くわけではないぞ、ゆっくりり行け、母なし仔牛よ。母親に拒まれた仔牛のようなアメリカのカウボーイ少年たちと、母親の犠牲の上に絶対的に保護された日本の子供たちの心理的比較によって、農耕社会と遊牧社会、母親中心の文化と父親中心の遊牧社会間の文化的違いを語っていることは常識中の常識です。

ところで、何故それが女性運動家の涙を流させたのでしょうか。多分それは『海辺の光景』の次の場面に、日本の女性であれば気が滅入らざるを得ず、可能であれば目を別の所に向けたくなることに対する、ある種の入り乱れた感情から来

るものではなかったでしょうか。

信太郎は母と台所のとりの茶の間でコタツにあたつてゐた。勝手口から御用聞がやつてきて、母はコタツの中から応対してゐたが何かのことで御用聞が「おたくの旦那は軍人さんですつてね」と問ひかけた。……御用聞の小僧は父の階級は何だとか、サアベルは何本ぐらゐ持つものかなどときいたあげく、「旦那さんは騎兵ですか」と云つた。

「さうぢやないよ」母はこたへた。「へえ？ぢや何です」（獣医だ）と信太郎はこたへようとして、コタツの下から母の手で足をギョッとつかまれてしまつた。そして母は、「さあね」と、急に冷淡な口調でこたへてから、信太郎の顔をじつと見て黙つた。そのとき母の羞恥心が端的に息子の心にのりうつつた。それは爪を立ててつかまれてゐる足の痛みといつしよに、ヒリヒリと痛いやうな恥づかしさを彼の心に植ゑつけた。と同時に、そんなつまらないことを恥ぢた母の態度がまた彼を傷つけた。

『成熟と喪失』前掲書一二―一三頁

私がここで『海辺の光景』を論ずる立場でもなくそのような能力もありません。

『成熟と喪失』に対する是非を論ずることもなおさらありません。私がお話したいことは、ただ『海辺の光景』の作家が、植民地朝鮮で小学校校務をしたことに関連するということと、またそれは従軍慰安婦問題とどのような連結点があるかをうかがい知ろうとするに過ぎません。

僕の昭和史は、大正天皇崩御と御大葬の記憶からはじまる。（中略）その頃、僕らは朝鮮京城の憲兵隊官舎に住ん

でいた。父は職業軍人で陸軍獣医大尉であり、僕は南山幼稚園にかよっていた。となりが南山小学校で、そばを通ると重おもしろい歌声がきこえた。

安岡章太郎『僕の昭和史Ⅰ』講談社、一九八四、三頁

御覽の通り、父親は獣医師であり陸軍大尉。騎兵隊ではなく軍医官。それもただの軍医官ではなく、獣医師軍人であったことがあらわれています。だからといって『海辺の光景』が私小説^{わたくし}であり、それだけ個人的体験記に立脚していると言うには困難であると言っても、少なくともこの小説が持っている真実性というか、真実さが際立っていることを暗示したものと理解できそうです。ここにはそれなりのまた別の説明を付け加えることも出来ませんが、一九二〇年代植民地ソウルに居住する日本人の生き方の一つの断面描写が生きて呼吸しているからです。

いまの京城、つまりソウルは、人口五百万とかの超過密都市で、東京と同様、或いはそれ以上に活気はあるけれど、自然環境の破壊も甚だしく、むかしの面影はまったくくない。僕らのいた頃の京城は、人口は多分五十万ぐらい、小さいながら良くまとまって、ハイカラな感じの街だった。僕らが住んでいたのは、本町（いまの忠武路）という目抜き通りの直ぐ裏手で、おもての通りには三越だの銀座の亀屋の支店だのが並んでいた。（中略）空は、ほとんど一年じゅう晴れており、とくに冬になると青く澄んで、カーンと音がしそうな冴えた色をしていた。無論、スモッグなんかは全然ない。ただ、僕らは自動車には割合によく乗った。他にこれといった交通機関がすくなかったせいでもあるが、何といっても僕ら日本人はここで特権階級だったからだ。父は「やっと中尉に、貧乏大尉」という大尉だったから、そんなに豊かな暮らしが出来るはずはなかったが、軍人は景気不景気には左右されない職業で、給料も外地手

当がついていたし、住居は官舎で家賃もいらなから、経済的には内地勤務よりよほど楽だったはずである。僕は、ここへきて初めて、チョコレートだの、ハムだのソーセージだのというハイカラな菓子や食べものの味をおぼえた。父は長四角の青い罐に入ったウェストミンスターというタバコをふかし、母は髪をアイロンで縮らせて耳かくしという形に結っていた。

『僕の昭和史Ⅰ』前掲書七〇九頁

ソウルの気温が零下一〇度はありふれたことであること、しかしオンドルがあつて暖かであつたこと、ある日朝鮮人浮浪児少年が凍え死んだということ、日本人たちが服をやるとびりびりと引き裂いてしまったということ、朝鮮人の子は何とということ、などを安岡は回顧しているが、この中で注目すべきことは、彼が朝鮮で小学校に通つたということにおとらず、彼の父親が実は獣医師大尉であつたという告白でしょう。彼はこのようにまた書いていますからです。昭和五年三月から八月まで、父が陸軍獣医学校で研修を受けるため、僕らも東京で暮らした（二二頁）と。父親が軍医官であることは確かであるが、獣を扱う軍医官であつたということ、まさにそれが『海辺の光景』にそのままあらわれていませんか。江藤淳をしてそれほど上機嫌にさせたまさにその場面。私が、今更のように感嘆するのは、日本特有の私小説が持つ強韌性です。湿っぽくはあるがこの粘り強い自己告白の倫理的感覚こそは創作エネルギーの根源であつたという事実。韓国文学には欠如しているものと思えるこの倫理感覚が、実際は江藤淳の評論を生み出した源泉ではなかつたでしょうか。

冒頭で明らかにしたように、私が私小説論だとか『成熟と喪失』の出来栄を論じるために、こんな引用をしたのではありません。芸術院会員であり古稀にさしかかつた『海辺の光景』の作家のエッセイ一篇を吟味するためだけの私小説という高度の内向性を持ったこの作家のエッセイに、「折り畳み式舟艇と慰安婦」（『朝日新聞』一九九二・二・一

二) があります。昭和一九年夏旧満州渡河演習での一情景、という副題を付けたこの文章で、編集者は核心要素を大きく次のように選んでいます。

無心に魚を追っていた娘たち 憶い出せばなぜかあふれ出す涙

前のものは従軍慰安婦に対する回顧であり、後ろのものは戦死した戦友たちに対するものと整理できます。作家安岡において、この二つの記憶は分離することの困難なこととして読まれるようになっていたので、少し紹介してみたいのです。

一九四四年一二月学徒兵として安岡(慶応大学)が行ったのは、満・蘇国境である孫呉(Sunwu)という所。国境都市であるだけにロシア貨幣と中国貨幣などが同時に使われるアムール河岸のこの都市は、実に異国的でありながら荒涼たるところでありましたが、彼がとどまった場所は歩兵第一連隊。

孫呉の北のはずれの丘の上でありましたが、いったん何処かへ出ると、帰りは必ず長い長い坂を登って営門へ帰ることになっていて、それは言いようもないほど憂鬱な坂でありました。『僕の昭和史Ⅰ』、前掲書、二一六頁)と書いています。今、安岡は孫呉の慰安所を回顧しています。

私が軍隊で行っていたのは、旧満州のソ連国境に近い孫呉だが、そこでも師団司令部の近くに慰安所があって、営門に「満州第何百何十何部隊」とした大きな標札が出ており、誰の眼にもそれが軍の関与する施設であることは明らかだった。もっとも、その慰安所の構内に入ったことのある者は、私のまわりに一人もいなかった。私たちは、防空壕掘りの使役で師団司令部や偕行社(かいこうしゃ、旧陸軍の現役将校及び相当官を社員として、社員相互の扶助や親睦などの事業を行った団体。——訳者)などへ出掛けたとき、往復の途中に何度か慰安所の前を通ったというに過ぎない。第一、

私たち初年兵には外出は一切許可されず、日曜日や祝日で演習のないときは、内務班に居残って、古兵の下着の洗濯

や靴磨きなんかにはコキ使われるだけのことだ。私たちより一年前に入隊した二年兵も、同年兵の一人が脱走したとい
うので連帯責任を問われ、公用以外には全員が一度も外出させて貰（もら）えなかった。

『朝日新聞』一九九二・二・一二夕刊

もともと孫呉とは前述したように北辺の国境の寒村で、草原が広がっている荒野なので外出しても行く所は無かったし、
軍用の映画館があるにはあったが、戦意昂揚映画なので、興味を引かれる訳でもなく、古参兵たちの外出もうらやまし
もなく、ただ飯を腹いっぱい食う事と眠り放題眠らせてもらうことだけが関心のすべてであったこと。それではいい
どんな訓練を行ったのでしょうか。毎日河岸に出て、折り返み式上陸用舟艇、というのを組み立てて、これを担いで土堤か
ら河岸まで運び、再び解体する訓練でした。小型自動車くらいの重さの折り返み式の舟艇を八人が担ぎ上げ、石ころだ
けの河原を過ぎて河岸まで運んでゆくことは並大抵のことではありませんでした。この苦役の中で見た情景こそは作家の
視線ではなかったでしょうか。

旧満州でも夏の真昼の日射しは暑い。しかし、土堤のうえを吹き抜ける川風は、サラリとして快い。私たちは草原
に腰を下ろして、爽涼（そうりょう）の気分を満喫していた。すると班長のE軍曹が、こちらを振り返って言った。

「見ろよ、動員で孫呉の部隊はどことも大忙しのテンテコ舞いだから、慰安所の姐（ねえ）さんたちはお茶っぴきらし
いぜ」ふだんマジメなE軍曹がこんな言葉を口にするとは、私は意外だったが、言われてみるとなるほど、川の浅瀬
のところ若い女たちが五、六人、水をはね上げて駆け廻っている。しかし、その姿は私の考えていた「慰安婦」と
は一致し難く、ただの娘さんと思えなかった。彼女らは、どうやら小魚を浅瀬の洲の中に追い込もうとしている

らしく、なかで大柄な二、三人が水の中で手拭(てぬぐい)を揚げながらこっちの方へやってくる。大きな麦藁帽子に隠れて顔はよく見えなかったが、たくし上げたスカートから覗(のぞ)く脚は、まぶしいくらい白かった。——
女の子の脚とはあんなに白いものだったのだろうか。私は、そんなことを口の中でつぶやきながら、しばし茫然となっていた。

『朝日新聞』一九九二・二・一二夕刊

部隊が南方へ出発したのは、それから二週間ほど後、一九四四年八月二〇日全部隊が出動して、これら部隊はフィリピンの激戦地レイテ戦鬪に投入されました。その戦鬪のいきさつは記録文学の傑作である大岡昇平『レイテ戦記』に詳細に出ていますね。その一節を安岡二等兵が引用しています。レイテ到着前に歩兵第一連隊、第四九連隊、第五七連隊等の一部がルソン島北部に一時上陸したことを叙述した一節がありますが、そこには次のように記したそうです。『ただし上陸用の大発(だいぱつ)〔大型発動機艇〕の略——(訳者)の用意はない。小さな折畳舟艇を使うので、暗夜揚陸は危険だが、それを買しても上陸させたいという片岡師団長の意向であった』と。片岡師団長は孫呉で安岡らを訓練させたまさにその人でありました。

安岡二等兵は幸運にも南方行から落ちましたが、その自身の記録はこうなっています。『部隊が出発する前々日、四十度以上の高熱を発して(胸膜炎)、翌日、僕は部隊から病院に移され、二箇月ばかり孫呉の病院に置かれ、内地送還になって大阪陸軍病院に着いたのが一九四五年四月であった』(『僕の昭和史I』二二六頁)と回顧しています。自身の言葉通り折畳式だとか女たちのその白い脚などは他人には無意味なものでしょう。しかし体験した当事者には消すことのできないほど心に刻まれたものなのです。

一般読者には何の変哲もない文章だろう。しかし私は《小さな折疊舟艇》の字句を見た瞬間、孫呉での渡河演習の情景と、無心に魚を追っていた女たちの白い脚を憶（おも）い出し、たちまち眼の中がくもって、なぜか熱いものが溢（あふ）れ出してきたのである。

『朝日新聞』一九九二・二・一二

この純白のイメージとは果たして何ででしょうか。私はこのイメージとは他でもない日本文学の最上級の表現の一つだと推測します。私小説と言おうと、リアリズム系と言おうと、そのような分類でははかる事の出来ない境地、また言葉をかえれば『海辺の光景』の文学が成しとげた、そんな境地ではないでしょうか。この瞬間、日本文学は従軍慰安婦を聖なる空間に引き上げたと言えないでしょうか。私があえて日本文学の表現力まで問題にするのも、それなりのまた別の意味が隠されていると思うからです。先に調べましたように、安岡の父親は軍医官大尉ではあっても、また植民地朝鮮に特権層として君臨したとしても、ただしてみれば、獣医師、大尉に過ぎないことは、『海辺の光景』にそのままあらわれていて、江藤淳の『成熟と喪失』の冒頭を飾っています。しかし文学の課題と言えば従軍慰安婦問題とは、国籍とは関係なく、それ自体が問題視されるものでしょう。慰安婦は日本、中国、朝鮮、インドネシア、フィリピン、オランダ等の国籍を持っています。また彼ら各々の処遇には違いがなくなってしまうのが、慰安婦の身分であることには変わりないこと。魚を追っている川辺の慰安婦たちのその、純白の脚には変わりないということ。これを指して日本文学の普遍性の中に潜む加害者の要因を読んだらどうでしょうか。

私がこの文章で問題にしようとしていることは、まさに右の問いなのです。朝鮮人慰安婦を朝鮮人学徒兵が見たならばどうだったのかそれがですが、ここには歴史的な説明がなくなっています。要するに、帝国日本が学徒兵総動員令を下し

実施したのは一九四三年一二月であり、植民地朝鮮人学徒兵の総動員令を下し実施したのは、一ヶ月後の一九四四年一月二日でした。総四、三八五名が入隊し、中国、南方、ビルマ戦線等に投入されました（拙著、『日帝末期韓国人学徒兵世代の体験的創作論』、ソウル大出版部、二〇〇七）。これらの中には脱出して臨時政府や朝鮮義勇軍（八路軍指揮下）に行っただ者があることはありますが、大部分が日本軍で勤務し八・一五（朝鮮の独立日一九四五年八月一日）以後、帰国して新しい国の建設に主役を担当することになります。そのうちビルマ（インパール Imphal 作戦）に投入された学徒兵が一つの小隊に一緒にいましたが、李佳炯（イカヒョン、東京帝大仏文科）、李鐘實（イジョンシル、中央大学法学部）、朴順東（パクスンドン、駒澤大学）等が彼らです。この中で李鐘實と朴順東はビルマ戦線から脱出して、米軍 OSS（Office of strategic service 米国防略情報機関）に加担しましたが、彼らが脱營する時の光景の一つを、後にノンフィクション作家になった朴順東は次のように記しました。

〈クメ〉部落が近づくにつれ右往左往する兵隊たちの足が速くなり、〈クメ〉部落に入る岐路がある喬木の下には将軍クラスの乗用車が二台、そしてトラック三台が占拠していた。安師団本部が来ているようであった。

トラックの前を過ぎるとトラックの前でざわめいている兵隊たちの向こう側から、上気したような女の慶尚道訛りが聞こえてきていた。兵隊たちの後ろに近づいてみた。七、八名の女たちがトラックの下の地べたに包みを置いて、その上に身をかがめて座っていて、その中の女の一人が愚痴を並べ立てていた。女たちはモンペに袖の短い白いシャツを着ていた。木の葉の間からもれている月の光を受けて、その白いシャツがひとかたまりの匏花ひきよはなのようだった。

愚痴を言っている女は頭がおかしくなった人のように小言を並べ立てていた。繰り返す言によれば、彼らは〈クメ〉本部落に来ていた韓国人慰安婦たちだった。昨晚抱え主（あるじ）のやつがどこへか逃げ去ってしまったということであった。そして日本人たちだけが、皆発つのに自分たちをトラックに乗せてくれるように頼んでも知らないと拒絶す

るといふことである。それで将校たちに集団で行って食らいつかねばと別の女たちをあおり立てたりした。

しかしトラックにはみな山のように荷が積まれていた。荷の上に座った兵隊が彼女らを見下ろしながら一人からからと笑いこけていた。

「おい朝鮮ピーー! (ピー〈妣〉は中国語で女性の生殖器を表す言葉。英語の prostitute 〈売春婦〉の P であるともいふ——訳者) お前たちは昨日は一回に五〇ウォンよこせと言ったな。今はいくらでやらせてくれたんだ。今は。へへ：ハハハ…」

ビルマに来て初めて朝鮮ピーを見た時の恥ずかしさは、その後広大なビルマ戦線にわたって非常に数多く彼女らと会うことよって消えて久しかった。日本ピー、中国ピー、ビルマピー それぞれ慰安料が違った。日本ピーの慰安料が最高価であることはもちろんだ。他のピーはさておきこの可哀想な同胞たちはどうなるのか：しかし彼女らの運命を心配する余裕はなかった。我々はひどく道を急いでいたのである。

朴順東「侮蔑の時代」(『新東亜』一九六五・九) 三六五頁

全羅南道順天にある仙岩寺という寺の費用で、駒澤大学に留学中に学徒兵として行った朴順東(『太白山脈』〈邦訳あり〉の作家、趙廷來の母方のおじ)の上の記録の圧倒的な響きは、朝鮮ピーでありましょう。ここには歴史的問題が置かれている事は落とすことが出来ないでしょう。中国、ビルマ等の慰安婦を相手にする、日本軍に編入された中国人、ビルマ人はいなかったという事実です。よってこの点が他の国籍の慰安婦とは異なる、朝鮮人学徒兵にだけ強圧された、自意識でなくて何でしょうか。この自意識を朴順東が素朴ながらもそのまま現したものだと言えます。中国人でも、インドネシア人でも、フィリピン人でも体験した事のない韓国人だけの特殊性、まさにここで、慰安婦問題が唯一韓日間の問題と

して今日までも消すことのできない課題として横たわっています。安岡章太郎における慰安婦認識とは根本的に異なった座標に立っているからです。

しかし、それにもかかわらず朴順東と安岡の記録が持つ意義は何でしょうか。私が問題としようとしていることは、まさにこの問いの中に根を下ろしています。即ち、朝鮮人朴順東も日本人安岡もただの「人間」だという事実。言葉を変えて言えば、人間であるからこそ人間だけが可能な、共通した最上のイメージを知らない間に体得していたという事実がそれ。その最上のイメージとは、一番切迫した状況からかろうじて導き出されるということ。脱出直前の朴順東と折り畳み式の舟を担いで川底をさまよう過程での安岡とは、そのような状況に置かれたということ。その時朴順東は月夜に映った慰安婦の白い袖から、田舎のわらぶきの屋根に暗くなると咲くひと群れの匏花の白い花を見ていたのでしょうか。暗がりの中で咲く純白の匏花のイメージとは事新しく何でしょうか。

(金素雲の日本語の随筆「匏の花」があります。郷土といえ、即ち母親が思い浮かぶというこの文章では、ただ一つ朝鮮の匏花の花を問題にしました。『恩讐三十年』ダヴィッド社、一九五四) そうだとしても、その匏花の花は柔らかなく品のある白い色ではなかったでしょうか。安岡が見た、まぶしい白い脚、とこの匏花の花は、その白い色彩において同質のイメージではなかったでしょうか。この点を評価することがなければ、慰安婦問題とは依然として歴史の迷宮の中で浮遊してしまうかも知れません。

三、私小説と小説創作

韓・日学徒兵の視線に捉えられた挺身隊が、純粹に白色イメージであったと言っても、これはどこまでもノンフィクションの領域でした。芸術の本領に達しなかったか、超越であるとも言えるでしょう。そうであれば純粹に芸術の場合であれ

ばどうでしょうか。この点日本文学は大変威力的であり、まさに特有の『私小説』という高度の領域が開発されているという事実からきます。そもそも日本式私小説とはどんなものでしょうか。私はほとんど何も知らないのですが、いくつかの解説書の中で少しは理解できそうなものには、大江健三郎のものがあります。氏は少々困ったようにこんな前口上で説明を試みました。

日本語の小説の特殊さとして、私小説の書き方がいわれるのは新しい話ではない。しかし実際に私小説を読んだ外国の研究者から——高い水準の専門家たちも少なくないけれど——、どのように独特なのかとあらためて説明をもとめられてみると、答えは難しかったものだ。「私」のことを日常的な事実にそくして書く小説なら、あらゆる国語の文学にあるのだから。

『小説の経験』、朝日文庫、一九九八、二三四頁

大江の説明に依存すれば、日本語の私小説とは、『私』の観察力や思考、想像力が、『私』として小説を書いて行くもので、おかしな複雑性、癖くせ（一定の状態が固まったもの）があるということです。創作をする人間は私小説の、『私』でのみ現実を生きざるを得ない人間として染まってしまっていることを感じると言うこと、そのような、『私』の自己表現でありながら、また一方でそこには日本人の不可思議さ、日本語の不可思議さの認識への道を開いてゆく場合さえもあるということです。そのような例の代表的なものとして古山高麗雄（一九二〇～二〇〇二）の「セミの追憶」〔『新潮』一九九三・五〕をあげています。私がこの小説を買い求めて読んだのは、一方では私小説の意味を知るためではありますが、もう一方では、この点が大切なのですが、一時私が学徒兵に対する関心を持ったからです。「セミの追憶」とはビルマ戦線に投入された

京都三高（廉想渉の『三代』（邦訳あり）の主人公趙德基はこの三高の卒業班であった）中退生である作家の朝鮮慰安婦と関連のある話であるからです。巨体の朝鮮ヒーを古木だとすれば、そこにくっついてしがみついている兵隊たちとは「セミ」と同じ状況であったということ。この詩的イメージを検討することが、私の目的であったのですが、読み進めてゆく間に、突飛なことに次第に私の関心が「私小説とは何か」ということに向かったではありませんか。

“このところ、やや下火になっているが、先般、戦争中の従軍慰安婦のことが、大騒ぎに騒がれた”で冒頭が始まっているエッセイ式文章に続いて、従軍慰安婦とは自分と同年輩であること、当時自分は二二歳であったが、今は七三歳であること、よって現在は古稀を過ぎたと言うこと、慰安婦とは言っても彼らが経験した数々の苛酷なことは余りにも多様であるので、一律に語ることは出来ないということ、などを書いては、他人事のような口ぶりで、つまり「聞いた」といった形式でこんなことも記していました。

あのころにも私たちは、慰安所によっては兵士たちが行列を作って順番を待っているという話を聞かされた。戦後、ある朝鮮人従軍慰安婦は、一日に百人も二百人も客をとらされたという信じられないような話も聞いた。十二歳で日本軍に連行されて慰安婦にさせられた朝鮮人女性の証言も読んだ。その女性は、彼女と同じように連行された十八歳の朝鮮人女性が、日本軍の言うことを聞かなかったために、みんなのしている前で股裂きにされて殺されたと、信じられないことを言っている。しかし、おびただし数の慰安婦たちが、戦地に送られて死に、あるいは苛酷な目に遭わされたことは確かだ。ネーパン（ビルマ）の慰安婦たちも、かなりの客をこなさなければならなかっただろう。そして、あれからあと、大変な目に遭ったはずである。しかし、ネーパンでは、あの慰安所は、兵士たちが行列を作って順番を待つほどに混むようなことはなかったのである。ラッシュのはずの日曜日であるにもかかわらず、春子は、

春子の方から私に声をかけてきた。白蘭の部屋には切れ目なく男たちが出入していたが、松江はいつも、いわゆるお茶をひいていたようだ。

「セミの追憶」『新潮』一九九三五、五四頁

ここに登場する松江、白蘭、春子などは、皆朝鮮人慰安婦たちです。もしも大江氏の言葉のようにこの作品が私小説なら、そこにはどんな特徴があるのでしょうか。この短編はエッセイ式にジャーナリズムの輿論を冒頭に置いて、(1)自分がどこで勉強し、どうしてあの有名な三高を中退したのかの経緯を記しました。また(2)幹部候補生試験に落ちて兵卒として五年間を第一線である中国とビルマ、フィリピン、ベトナム等で勤務した事実を記し(彼は朝鮮新義州で医者をしていた家の息子として生まれたところから高麗という名が付けられた。中学校まで新義州で成長しただけに、小学校何年間かを南山小学校に通った安岡とは事情が違う)、軍隊生活の同僚たちを描き、彼らと共に朝鮮人慰安婦春子などと交際したことを記録しました。そして(3)、今は皆古稀を過ぎてどうやって暮らしているのか風の便りに聞いたりもしながら過ごしているという等の内容になっています。このようなものが、どうして際立った日本式私小説なのでしょう。大江氏は次のように答えています。

短編はこのようにしめくくられるが、読み手にとって「想像」はそのまま終ることにはならない。ランチにあいながら、独特なクセのある眼と心と、生き方のスタイルを持ちこたえた若い「私」は、老年にいたっても、なおその眼が見たもの、心が感じたものを手放さず生きてるのである。さきの従軍慰安婦にも、「知恵遅れ」で夜尿症の上等兵や、盗癖のある補充兵にも、つねに「私」は距離感のある冷淡な眼を向けていた。しかし「私」にとってかれらは、

五十年たつても《数少ない、いまだに名前をおぼえている人物》たちなのである。私小説家とは、そのような人物とともに生きつづけるという、人生の習慣を作ってしまった人のことだ。

『小説の経験』前掲書二三七〜二三八頁

私が教えられたことはまさに右の一節にそっくりそのまま含まれています。即ち、私小説作家とは自分流の人生の流儀を作り上げ、それを実践する人を指すのだということ。そのために彼には必然的にある事件や人物についての冷徹な眼、一定の距離を置いて眺める視線があるということ。それがひとつの「流儀」の創出となり、人生のスタイルを成したということ。こう見ると私小説家は対象に同化されずに、その対象の名を記憶しながら生きる人ではないのでしょうか。それ故、たとえその名を記憶したとしても、それ以上のどのような別の想像も出来ないわけでしょう。そう言えば作家自身が次のように私小説家を規定していました。

彼女（白蘭）はもちろん、春子も、一度私がセミになったぐらいでは、私を覚えているなどということはありえない。しかし、私の方では、彼女は、かなりあやふやだけれども、そして源氏名だけだけれども、数少ない、いまだに名前を覚えている人物の一人である。彼女は、どこかで生きているのだろうか。生きているとしたら、日帝に対して、はたまた自分の人生や運命について、どんなことを考えているのだろうか。彼女たちの被害を償えと叫ぶ正義の団体に対しては、どのように思っているのだろうか。そんな、わかりようもないことを、ときに、ふと想像してみる。そして、そのたびに、とてもとても想像の及ばぬことだと、思うのである。

『セミの追憶』前掲書五六頁

名を記憶するということ。その名から自己のスタイルを追求することが、まさに私小説家の本当の姿であるということ。言葉を変えれば、対象に対する一定の距離を維持することによって始めて可能であるということ。まさにこれが対象に同情するとか自己の感情で勝手に対処する一般的な情緒反応と区別されるということ。そのような典型として古山高麗雄の「セミの追憶」があげられそうです。『プレオール八の夜明け』（芥川賞）、『フーコン戦記』（菊池寛賞）等の作家古山は、隨筆集の題目を『反時代的、反教養的、反叙情的』（ベスト新書、二〇〇一）とつけましたね。（彼は一生涯戦争体験小説で一貫しましたが、処女作はサイゴン刑務所の記録で、『雄鶏通信』に掲載されたことが知られています。学徒兵の体験を絶対に書かないと言った作家加島祥造が、とうとう戦争体験記である「あの夜」を書きながら、友人古山を意識したそうです。『新潮』、二〇〇二・五、一二七頁）彼が経験した戦争五年間の体験がそのまま小説化されたのですが、特徴的なのは中年になって初めて作家として立ったという点です。捕虜収容所体験を始めとして、どのような戦場であっても、その中の日常的生の微細な価値は、ひとりぼっちの感覚として評価されるのも決して偶然ではないはず。『戦後日本文学史・年表』講談社、一九七八、三九一頁）それがたぶん京都三高中退生の生存のスタイルに他ならないでしょう。妻を先に亡くし一人暮らしの彼を嫁いだ娘が時々来て世話したもの、彼が亡くなった時その日時が分からないため、警察の検視がなされたそうですが（結城亮一「おだやかに語った人生運命論」『朝日新聞』二〇〇二・三・二六）、このように、ひとりぼっちの生存のスタイルから、はじめて本物の、私小説が生まれるというのなら、これをもって強いて、日本式私小説、と呼ぶ必要があるでしょうか。本物の作家であればどの国であってもこのように、ひとりぼっちのはずだからです。

四、告発型小説の二つの類型

これと比べると、どの国の文学にもある告発型小説の場合は事情がとても異なります。たとえば、尹静慕^{ユンジンモ}の『かあさんは〈朝鮮ピー〉と呼ばれた』（一九九七）がそのような事例の一つのはずです。八・一五解放の翌年に生まれた、この女流作家には慰安婦体験などはありません。作家は風聞、資料収集、挺身隊女性たちとの出会い等を通して小説を書いた場合にあたります。日本語の翻訳が再版まで出しましたし、オーストラリアの大学およびドイツ等の地で、作家との対話集会を持つほど、フェミニズムの次元を超えて多くの関心を集めたことが知られています。しかし仮にそうだとしても、告発型創作の定石からはずれたものではないと言えます。そもそも告発型小説とはどんなものでしょうか。リアリズム型に属するとは言っても、そこにはいくつかの特徴を引き出すことができるでしょう。

第一に、資料調査の徹底さ。たとえば、水曜集会^{ミツヨリ}、だとか、ナムム（分かち合い）の家（慰安婦のおばあさんたちが集まって住んでいる施設）^{ナムム}を訪問し、何人かの証言をそのまま信じてとか、またその証言が真実ではあっても、それは当事者たちの記憶に対する情緒的反応にはいろいろな落差があるという事実を念頭におき、これをどのような方式で批判受容するかについての作家の力量がかかっているという点。

第二に、小説形式で書く場合は、ノンフィクションとは異なり虚構的衝動を退けることが困難だという点。即ち、この場合に強烈性を狙った誇張法の誘惑から自由であることは実に困難なことです。これは対象の重要性に比例します。言葉を変えればこれは作家の使命の強さを決めることなので一層そうであるということ。

第三に、韓国文学が持つある種の特性と分離することが困難であるということ。即ち、分断問題、労使問題などで見せた告発型の強度が、次には国家間の問題へと簡単に変わってしまうことが出来たということ。『かあさんは〈朝鮮ピー〉

と呼ばれた』の場合も、そんな特性を持っているので、ある水準ではそれなりの成果を文学史の側で保証したと見られるでしょう。

この作品の話し手は一九四八年に生まれ、今は三七歳になるべ・ムンハという小説家に設定されています。彼の母親が、慰安婦出身であり、その母親の下で成長しましたが、あれこれ紆余曲折を経て父親べ・グアンハを探し当て、彼の葬儀にまで出席する過程を描きました。時々家に訪ねてきてお金を要求する、ならず者べ・グアンハと母親の関係が母親の一方的な話として叙述されます。故郷は晋州、名はスニ、兄の徴用の代わりに挺身隊に志願し、フィリピンに派遣され、あらゆる辛苦をなめ軍票（お金）を集め、その間に終戦が来ました。後退の途中で学徒兵として引っ張られてきた朝鮮人べ・グアンハが負傷して死境をさまよう時、彼女が進み出て助け、一緒に帰国して釜山で結婚して生んだ息子が他ならぬべ・ムンハであるということ。中学校に通っている時、軍に引っ張られてきたべ・グアンハを、学徒兵、と言ったとか、その他不正確な点があったとしても、母親の言葉で語られるので、少しも不自然だとは言えないでしょう。問題の重要性は次の二つ。一つはべ・グアンハが生涯安住できずに彷徨って死んだということを、作家は、日帝による被害意識、に転嫁したという点。もう一つは、小説の真の主題が告発型をかすめて、父親捜し、の方に傾いてしまったという点です。子供の父親捜しの過程で、母親の体験談が利用されたとも見られませんか。作家べ・ムンハが父親の生前に小説一編を父親の所に送ったという事実からもこの点が確認されます。

そうだとしても、『かあさんは〈朝鮮ピ〉と呼ばれた』をさして告発型と規定しても、何か妨げとなることはないでしょう。しかし、私がこれまでしてきた論議の中心軸である、まぶしい白い光、としての慰安婦のイメージに照らしてみれば、見逃すことのできない一節をかかえています。終戦直後の後退する場面を見ましょう。

わたしたちは、大きな道に沿って、ケソンの方へ歩いた。半日ほど歩いた時、山のような荷物を積んだ日本軍のトラックが、木の下に一列に止まっていて、その時、ちょうど前の車から、出発のエンジンをかけ始めていた。そして、その時のことだ。茂みの中からたくさんの女たちが、一斉にわあっと出てきて、トラックの方へ飛びついた。そして、われ先に車に上ろうと、餓鬼のようにぶら下がった。もんぺに短い袖の白いシャツを着た彼女たちは、朝鮮ピーだった。トラックの荷物の上に腰掛けた軍人たち：ああ、彼等も人間か。みんなが、へらへら笑っていた。笑いながらどうしたと思う。這い上って来る女たちを靴を履いた足で、蹴散らしたんだ。

『かあさんは「朝鮮ピー」と呼ばれた』鹿嶋節子訳、神戸学生青年センター出版部、一九九二、九五頁

、もんぺに短い袖の白いシャツとは、朴順東がビルマ戦線脱出直前に見た、もんぺに袖が短い白いシャツと重なるではありませんか。告発は告発としてしながらも、無意識の中に残っているこの、白いシャツのイメージとは、まさに、文学的現象、と言えないでしょうか。安岡章太郎の目頭を熱くした、無心に魚を追っていた彼女たちの白い脚も、そのような、文学的現象、の一種ではなかったでしょうか。この中に「セミの追憶」も生きて呼吸しているのではなかったでしょうか。

五、文学的現象、の指向性に寄せて

私の話があまりに長くなり、また取り留めもありますが、もう一つだけお話して終わります。朝鮮人学徒兵と朝鮮人慰安婦の出会いの場面がそれです。東京帝大仏文科在学中である一九四四年一月二〇日に、学徒兵として龍山第二六部隊に入隊し、五ヶ月間訓練を受けた李佳炯が、敗色濃厚なビルマ戦線（インパール作戦）に投入されましたが、彼が初めて

朝鮮ピ―と対面したのは、一九四四年八月三十一日ビルマのモールメインとなっています。宮崎上等兵の案内で訪ねて行った所の描写は次の通りです。

事務室のような部屋の窓の後ろの板壁には、樅、春江、貞子等の名札が五枚張ってあった。(中略)

“お前たち。連れてきたぞ。約束通りつれて来たんだぞ。”

宮崎がしゃべり立てるが早いか、どこからか五、六名の女たちがどやどやと集まってきて、私を取り囲むようにながら、ちょうどそこにあつた皮のソファ―に私をすわらせた。

“お兄ちゃんはいつ出て来たの。”

“お兄ちゃんの故郷はどこなの。”

遠く異域で出会つた同胞女性から、お兄ちゃん、と呼ばれると、私はどういふわけか目頭が熱くなった。(中略)

私と故郷が一番近いという群山出身の貞子というおとなしい顔つきの女が、私を彼女の部屋に連れて行った。(中略) 昼間の酒と蒸暑さに私は息が苦しく、全身は疲労で苦しめられていた。このように二人きりで顔を突き合わせているので、次第に部屋の中の空気が重苦しくなった。後悔と恥ずかしさが我々を一時捉えたようであった。

李佳炯「ビルマ戦線敗残記」、『新東亜』一九六四・一一・二七七頁

こんな状態がどれくらい続いたでしょうか。上等兵の催促にすぐ気を取り直した李佳炯は、全財産である軍票二〇ウォンの紙幣一枚を貞子の手に握らせそのまま部屋を出た、と記しています。また李佳炯はビルマのシーポでも朝鮮人慰安婦を尋ねて行き、晋州女子高中退であるミス金の「晋州なら千里の道」(ナム・インス)を聞いたし、即席で故郷木浦の歌

である「木浦の涙」(イ・ナンヨン)で答えたと記しています。ここでも日本将校の乱暴な行いによりそのまま別れたという事です。李佳炯は後に小説式に描いた長編『怒りの河』で、上の二つの場面を詳しく復元しています。その中にはこんな一節もあります。

暗くなりかけた頃に一人の将校が幕舎を尋ねて来た。彼は腰に軍刀を長く下げ、右の腰には拳銃をつけていた。服装だけでは戦闘部隊の将校のようではなかった。余りにもござっぱりしているので情報系統の将校ではないかと思う。三三軍の福村少尉だと自己紹介した彼が、文官として待遇を受けている朝鮮人だと私は直感的に感じた。

どういった成り行きなのか彼は横山中士(軍曹)と私をパーティーに招待した。横山中士は将校の招待を承諾しないわけにいかなかった。

福村少尉はパーティーに出席しなかったが、パーティーの場所まで我々を連れて行った。彼が慰安婦たちの頼みを聞いてやったことは間違いなかった。彼は朝鮮人慰安婦を監督する部署の文官のようである。

『怒りの河』慶雲出版社、一九九三、一〇三頁

私があえてこんな一節まで紹介する真意を推測できることと信じます。「セミの追憶」と小魚を追う慰安婦のまぶしいくらいの白い脚のイメージに敬意を表すためであると、あえて申し上げなくてもいいでしょう。「セミの追憶」の作家において私小説とは、生に対する全人的対応方式であったはずであり、白い脚のイメージもそんな片鱗の一部分ではなかったでしょうか。李佳炯の記録から生々しく見たように朝鮮人挺身隊の生の中にも、あのようなロマンが宿っていると、一つの事実であったはずで。異域万里において同胞男女の出会いとは朝鮮人だけの特殊性であったでしょう。日本

軍の中には傭兵ではない外国人としては、朝鮮人の他にはいなかったのですから。しかし同胞男女同志の出会いが持っている意義と言えば、善意の方向、また付け加えればロマン的指向性を持つことが出来た点だと言えないでしょうか。万一そうであれば、そのようなことを、文学的現象の一つであると言えないでしょうか。朝鮮人男女同志の問題が、人間の普遍的側面へと進みゆく入口の一つだと言えないでしょうか。ここからもう一歩だけ進み出れば、日本人の娘秀子と朝鮮人学徒兵阿魯雲（名古屋部隊輜重隊）の愛を扱った韓雲史『玄界灘は知っている』（正音社、一九六一、邦訳あり）に至るかもしれません。

取り留めのない私のお話を聞き下さった方々にお礼を申し上げます。

（芹川哲世訳）